

昭和十五年八月

清水港擴張計畫調查委員報告

清水港擴張計畫概要

港
灣
協
會

調査経過概要

一、昭和十五年三月二十五日、静岡縣知事小濱八彌氏より調査方依頼せらる。

一、昭和十五年五月十五日、本會は審議の結果右依頼に應することとし水野會長より左記の通調查委員を依嘱す。

主　　查

委　　員

同　　同

工學博士 安　藝　杏　一　氏

内務省横濱土木出張所長 三　輪　周　藏　氏

前内務省横濱土木出張所長 春　木　節　郎　氏

鐵道省工務局長 阿　曾　沼　均　氏

日本郵船株式會社常務取締役 大　矢　新　次　氏

一、昭和十五年五月二十三日、安藝、三輪、春木、大矢各委員阿曾沼委員の代理として三浦工務局計畫課長鶴岡幹事、橋本、内田兩嘱託、白井調査部員の一行は本港の實地調査をなし且つ座談會に於ける地元民の希望意見並諸資料に基き五月廿五日清水市に於て第一回委員會を開催し修築の大體方針を協議したり。

一、昭和十五年六月十日、第二回委員會を東京に於て開催し地元より大石靜岡縣土木部長、山本河港課長並佐藤清水市助役の參加を求め安藝主査の下に於て立案せる計畫案に

就き協議を重ね、次いで七月十一日更に第三回委員會を東京に於て開催審議の結果意見の一一致を見たり。

一、依つて文書に依り各委員の意見を求め會長の決裁を経て昭和十五年八月本港擴張計畫の確定を見たり。

昭和十五年八月

港灣協會

目次

第一章 港の現況	一頁
第二章 計畫の要綱	六
第三章 計畫の説明	10
第四章 工期及工費概算	四
(附圖)	

清水港擴張計畫平面圖

清水港擴張計畫概要

第一章 港の現況

清水港は靜岡縣下第一の樞要港にして其出入貨物は年と共に増加し殊に昭和十二年修築工事完成後に於て時恰も今次事變に際會し生產力の擴充、時局產業の殷盛に伴ひ港勢頓に活況を呈するに至れり。

昭和十三年に於ける本港内外貿易は内國貿易百十萬三千九百八十五噸、外國貿易三十二萬八千四百九十八噸、合計百四十三萬二千四百八十三噸、其價格約一億千九百萬圓にして、五年前なる昭和八年の出入總額百二十四萬噸に比較すれば移入木材が著しく減少せるにも係らず尙約一割六分を增加す。内國貿易は移出約十八萬八千噸、移入約九十一萬六千噸にして、移出貨物の主なるものは製材、函材(一萬噸以上順次、以下同じ)移入貨物の主なるものは石炭木材、セメント、米、バルブ、砂糖、鹽、

苛性曹達、肥料、大豆なり。外國貿易貨物は輸出は六萬一千餘噸(紙類、罐詰、茶)、輸入は二十六萬七千餘噸(大豆、石炭、肥料、木材)なり。本港出入貨物中其後方聯絡が鐵道輸送に依るもののは約二十四萬噸(約一割七分)、道路輸送に依るもの約二十一萬噸(約一割五分)なり。

昭和十三年本港出入貨物を荷役場所別に區別すれば左の如し。

沖 荷 役	九五六、七七三噸	六割七分
岸 壁 荷 役	二二九、四七〇"	一割六分
物 揚 場 荷 役	二四六、二四〇"	一割七分
計		一、四三三、四八三"

沖荷役貨物の内約八十萬噸は工場荷役場並に特定荷役場を出入する貨物にして、殘餘の約十六萬噸の一部は岸壁を出入し大部分は物揚場に揚卸せらる。斯くて岸壁取扱貨物は總額約二十三萬八千噸となり之を總延長七百七十米に割當つれば一米約三百十噸にして岸壁の能力に尙餘裕綽々たるものあり(尤も昭和十四年には岸壁取扱貨物は三十七萬五千噸にして一米の取扱量四百八十七噸に相當す)又物揚場扱貨物は約四十萬噸となるを以て之を現在利用中の物揚場總延長

九百三十米に割當つれば一米の取扱量は四百三十噸なり。斯の如く岸壁及物揚場の利用能率未だ低位なるに係らず上屋は常に貨物を以て満され荷役場亦相當に混雜を呈す、之が是正に關し管理者に於て適當に考慮を拂はるゝ必要あるべし。本港移入貨物の大宗たる石炭は其量約六十萬噸に達し出入貨物總噸量の約四割三分を占む。然るに鐵道省の計畫せる本船接岸荷役設備は附帶設備其の他の關係上未だ使用するに至らず、爲に其荷役たるや全部解荷役に依るものにして其水陸聯絡極めて不備なるのみならず外港の解荷役は本港の惡風たる東北風の爲め屢々阻礙せられ本船の滞船を永引かせ荷役費並に運賃の嵩上を來し後方地域内工業の發展に一暗影を投ずるの感あるは遺憾なりと云ふべし。

木材及木材加工品は亦本港重要貨物の一なり。外材の輸入は逐年増加の趨勢にあるも、樺太材及北海道材は近年著しく減少し、昭和九年の約二十五萬八千噸が同十三年には約五萬七千噸に激減し隔世の感あり、然れども本港の木材工業は其根柢頗る深く沿岸工場は其數四十八に達し外材約九萬噸、内地材約四十萬噸を消化し得るの能力を有す。日支事變以來製材の輸出せらるゝもの頓に増加し昨四年には約四萬七千噸に達せりと云ふ。

本港入港船舶は逐年増加し昭和十一年には其隻數七千百七十一隻、其登簿噸數三百四十八萬六千九百六十三噸に達せしが、爾來少しく減少し同十三年には七千二十四隻、二百九十一萬六千九百四十九登簿噸となれり。十三年の入港船舶中汽船は九百七十一隻、二百七十五萬餘噸にして一隻の平均登簿噸數は二千八百餘噸に當る。内千噸以上五千噸未満のものは其七割五分、五千噸以上のものは其一割を占む。同年中入港の最大汽船はエンプレスオブカナダ號なりき、發動機船は漁船を併せ六千五十三隻、十六萬五千餘登簿噸にして一隻の平均噸數は二十七噸餘(最大船の噸數は九十九噸)なり。

本港に寄港する定期航路線は東亞海運の横濱上海線外十一線にして、寄港回數は横濱上海線の月五回を筆頭とし他は概ね月一回若くは二回なり。而して其就航船隻數は三十九隻、其登簿噸數二十六萬五千噸に達す。本港より北米に輸出する茶蜜柑、罐詰は桑港航路及シアトル航路の大型客船又は貨客船に依る。而して是等の船舶は定期船たるの關係上、夜間に入港し外港に假泊の上夜間荷役をなし翌朝横濱港に向け出港するを常とす。之を以て天候平穏の場合には何等問題無きも一旦荒天に際會すれば船の荷役意の如くならず積荷半にして出港すること

あり、之が爲に荷主に測らざる損害を與ふること年間一再に止らずと云ふ。

清水市内及附近地域に於ける工場を調査するに罐詰工場十五、造船所九、鐵工所三十一、製材及製函工場四十、織布及撚糸工場十一、其他三十八、合計百四十七を算し、内百人以上の職工を使役するもの十八工場あり、之の外目下建設中に係るものに京濱鐵工(敷地千二百坪)日本輕金屬(十五萬坪)日本發送電(四萬三千七百坪)鶴見窯業(三萬坪)大阪石綿スレート(二千坪)東亞燃料(七萬坪)の六工場あり、尙目下交渉中のものに二、三の大工場ありと云ふ。是等諸工場が愈々操業を開始するに至れば本港の躍進は一層顯著なるものあるべし。更に目を轉じて本港後方地域に於ける産業を遠觀するに富士、沼津方面の纖維工業及製紙工業、靜岡地方の製茶、蜜柑及漆器、濱松方面の纖維及織物工業等は其產額數億圓に達し尙ほ今後の發展を期待せらる。本港の任務は將來益々重大なるに至るべし。

工場の建設に最も必要なるもの、一は用水なり。縣は安倍川の左岸に於て同川の伏流水毎秒時二十立方尺(日送水量四萬八千疋)を取り入れ、延長一萬九千百米の送水路を築設し以て靜岡、清水の兩市並に有度村の工場地域に工業用水を供給するの目的を以て現に工事施行中に屬す。本工事竣工の上は工場の招致に一層の

拍車を加ふるに至るべく、唯其規模の稍小に過るを憾みとす。

六

當地方の風位風速を調査するに毎秒風速五米以上の風位は南最も多く南南西及北東之に次ぐ。南寄りの風は春季より夏季に至る間に多く、北東寄りの風は春季及秋季に多し。而して最大風速は前者は二十一米五にして後者は八米四なり。

本港は其入口北より東に展開するを以て南風は敢て恐るゝに足らざるも北東風は常に其暴威を逞ふし或は船舶の岸壁離着を妨げ或は外港泊地の解荷役を不能ならしむ。其結果は貨物の運賃並に荷役費の低下を期するを得ず本港の進展に少からざる障礙を來すは誠に遺憾なり。殊に最近袖師方面の埋築により從來の砂海岸が相當水深を有する直壁護岸となりたる爲め北東の波浪は北西の反射波となり外港泊地に所謂三角波を起し風力左程強からざるも荷役不可能となる場合少からず、本港關係者が防波堤の築造を熱望する蓋し故なきにあらざるべし。

第二章 計畫の要綱

一、折戸灣は其一部は既に水深七三米に浚渫せられて三千噸級汽船三隻の安全なる碇繫場を供し、其南部には大貯木場あり、西岸には鐵道省の石炭荷揚用岸壁及

公共用荷揚場あり、石炭岸壁の外は皆相當に利用せらるゝも其の他の沿岸は總て在來の儘に放棄せらるゝを以て此際之が浚渫區域を擴大し、沿岸を整理して埋立線及水陸聯絡用構造物築出の法線を劃し以て工場地帶の進展を圖るは本港の現状より見て急務なりと思考す。又折戸方面に小型船の船溜を築造し其沿岸を公共用に供する必要あり。而して既設の諸設備は陸上の施設不備なる爲め其機能を發揮する能はざるは遺憾なり。臨港鐵道の延長並に上屋又は倉庫の建設は急務なりと云ふべし。

二、塚間地先の入江は其沿岸を整理し適度の水深に浚渫し其一部に公共用荷役場を設置するの要あり。

三、石炭は本港の最も重要な貨物なり。其荷役設備を改善し合理化し以て其運賃を低下し荷役費を廉ならしむるは焦眉の急を要す。目下鐵道省に於て計畫中の石炭荷役設備は既に着工の域に達したるものにして其速成を希望するも本施設は大體一ヶ年、約百萬噸を目標とし其積載船は大體三千噸を標準とするに過ぎず、今日の情勢より見て其規模の小なるは疑の餘地なし。斯くして本港石炭荷役設備は大體年二百萬噸を目標とし尙ほ支那炭の輸入を慮り一萬噸級船の接岸

可能なる大埠頭を新に建設するを以て適切なりと思考す。其築設場所は之を外港内適當の地に求め本埠頭實現の曉には現在豫定の鐵道省石炭岸壁は之を一般貨物の荷役用に提供し得べし。

四、本港重要輸移出貨物たる木材加工品に對し一時貯置の特定場所無き爲め業者は隨時隨所の物揚場又は岸壁を利用し荷役を困難ならしむるのみならず荷役場混雜の一原因をなすを以て木材加工品の特定荷役場所並に貯藏所の新設は大に必要なりと認めらる。而して其場所は貯木場附近に求むるを以て便とすべし。

五、現在使用中の岸壁及物揚場の總延長は千七百米にして其取扱總額は未だ八十萬噸に満ず其利用能力に相當の餘裕あり、然るに係らず埠頭が割合に混雜をするは陸上設備の不備並に陸上設備管理の缺陷を物語るものにして適宜改善を要するものと認めらる。

六、本港の發展に順應すべき雜貨荷役場の將來の擴張に關しては鐵道省岸壁を之に充當する外、折戸灣内既設物揚場の前面に丁字型大埠頭の築設に依り之を解決するを得べし。

七、本港後方地域内に於て水陸聯絡設備を有せざる工場は今後相當の發展を期するを得べし。

待せらるゝを以て、主として是等工場の出入貨物の荷役及一時的貯藏を取扱ふ埠頭設備の新設を外港内適當の場所に豫定し置くは必要なりとす。

八、本港出入貨物の約七割は沖荷役に依る。而して其大部分は外港泊地に於ける解荷役にして常に東北風の脅威に曝露し殊に短時間寄港の大型定期船に於て其影響の大なる已に述べたるが如し。是等脅威を除却し併せて外港内に建設せらるべき諸設備を掩護する爲め大體現在の港界線の附近に大防波堤を築造するは適切なる處置と認めらる。

九、三保眞崎の南方水面は眞崎により東北風を遮断せらるゝを以て比較的平穏なり。之に多少の浚渫を加ふれば二萬噸級船及六千噸級船各一隻を收容し得べきを以て差當り應急施設として繫船浮標を設置し荒天に際し解荷役の安全を圖るは緊急事たるべし。

一〇、新船溜は防波堤を改築して其收容水面積を増加し以て其混雜を緩和すべし。

一一、江尻船溜に漁港施設を完備し現在の狹隘なる魚市場を移轉する必要あり、斯くして漁業の擴充を圖り得べく同時に新舊兩船溜の混雜を緩和し得べし。

一二、鐵道省の清水驛貨物繰車場は將來擴張を必要とすべし。而して之を袖師寄りに擴張するを以て得策なりと考へらる。斯くして江尻漁港の充實に必要な地所を提供し得べく、又新に計畫する石炭埠頭の繰車にも少からざる便益を與ふるを得べし。

一三、巴川沿岸には已に相當多數の工場あり、同川を運河化し適宜上流に及ぼすに於ては其兩岸は工場地帶として相當發展を期待し得べし。本運河の計畫は別途に調査考究すとするも差當り現在清水市内に屬する巴川の浚渫及兩岸の荷役場改善は必要なるを以て縣又は市に於て考慮せられんことを望む。

第三章 計畫の説明

一、折戸灣の整理改善

折戸灣は其沿岸を圖面の如く埋立て工場用地に供す。其北岸は埋立線より三十米を隔てゝ岸壁又は棧橋の築造法線を割し必要の場合工場荷役場に本船繫溜を可能ならしむ。

灣内は水深八米及七・三米に浚渫し三千噸級乃至五千噸級汽船六隻の同時碇繫

に支障なからしむ。

灣内貯木場の東部埋立地内に長二百米、幅百米、水深三米の船溜を存置し其沿岸幅員三十米を公共荷役場に供す。

村松地内長七百四十九米の物揚場の内震災後護岸として復舊せる部分長合計三百三十五米を物揚場に改築す。

貯木場西防波堤の内面に長二百米幅百米の木材専用突堤を築造し木材加工品の貯藏及移出場に供す。突堤の周圍は水深三米の物揚場とし將來必要の場合には其北岸を改築して適宜水深の岸壁となし本船の接岸を可能ならしむ。

二、塚間地先入江の整理

塚間地先の入江を圖面の如く整理し之を水深四米に浚渫す。其東部に長百米幅三十五米の公共荷役場を設置す。

三、現存船溜防波堤の改善

新船溜及江尻船溜の防波堤を圖面の如く増築又は改築す。

四、保地先通稱箇下に於ける應急施設

三保眞崎南方の水面に圖に示す如く水深十一米の浚渫を施行し二萬噸級及六

千噸級汽船繫留用浮標二個を設置し荒天に際しても沖荷役を可能ならしむ。解
船の運航に多少の不便あるも蓋し止を得ざるべし。

五、大防波堤の築造

大體港界線の位置に圖に示す如く南北兩防波堤を築造す。北堤は長千八百二十米、南堤は長五百米にして兩堤頭間に三百米の港口を存置す。南堤は北堤の築造が眞崎半島に及ぼす影響如何を篤と考究の上其位置及方向を決定するを以て妥當なりと認めらるゝが故に、北堤の築造中は常に眞崎半島の變動並に附近水深の變化に就き細心の注意を拂はれんことを望む。而して之が築造は次期工事に譲る。

六、外港内袖師地先の施設

北防波堤と袖師地先既成埋立地間の沿岸を圖面の如く埋立て其一部を港灣用地に、殘部を工業用地に供す。

港灣用地の南部に長二百米、幅二百米、水深四米の船溜を築造し其周圍に幅三十米の物揚場を設け小型船の荷役場及溜場に供す。

工業用地内に長二百米幅五十米の水面を存し波多打川の新下流を此處に注が

しめ、尙小型船の溜場及荷役場をも兼ねしむ。

船溜の北方に長平均三百七十五米幅二百米の大突堤を築造し専ら石炭の荷役に供す。岸壁は水深八米及九米とし大型載炭船の接岸荷役をも可能ならしむ。

即ち八米岸壁は延長三百七十米、九米岸壁は延長三百四十米、合計岸壁延長七百十米にして機械設備に依り一ヶ年二百萬噸の石炭を取扱ふに支障なからしむ。突堤の方向は本港の最多風たる南寄りの風に對し本船の岸壁離着を便ならしむる爲め南微東とす。

石炭突堤の北方百八十米の位置に長平均三百三十五米、幅百二十米岸壁水深八米の繫船突堤を築造す。本突堤は主として今後相當の發展を期待せらるゝ本港後方地域内水陸聯絡設備を有せざる工場に出入する貨物の荷役並に一時貯藏所に充てんとするものにして之が築造は次期工事に譲る。

七、浚渫及埋立

浚渫及埋立の區域、浚渫の水深及埋立地の高は圖に示すが如し、浚渫土量は内港二百九十六萬立方米、外港百四萬立方米、合計四百萬立方米、埋立土量は内港百二十五萬立方米、外港四百二十萬立方米、合計五百四十五萬立方米にして差引埋立土

量に百四十五萬立方米の不足を生ず。この不足は附近の海底を浚渫し之に充當す。理立面積は内港三十五萬平方米、外港七十六萬平方米、合計百十一萬平方米(約三十四萬坪)にして内約三十六萬平方米は港灣地帶、約七十五萬平方米は工業地帶なり。

八、陸上設備

臨港鐵道及臨港道路は大體圖に示すが如く敷設することとし、道路幅員は二十米及十五米の二種なり。上屋は差當り村松地内物揚場に一棟、江尻船溜西岸に一棟を建設す。前者は長百米幅員三十米、後者は魚市場用にして長百米幅二十米とす。

第四章 工期及工費概算

工期は十ヶ年とす。

工費概算は千九百萬圓にして其内譯左の如し。

工種	数量	單價	金額	備考
大防波堤	一、八二〇 <small>米</small>	三、〇〇〇	五、四六〇、〇〇〇 <small>円</small>	水深五米乃至二十三米
船溜防波堤	四三〇	七〇〇	三〇一、〇〇〇	水深二米乃至五米
岸物護凌埋	九五〇	二、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	水深九米及八米
揚	一、八三五	四〇〇	七三四、〇〇〇	折戸灣内護岸改築を含む
機械	五、四〇〇 <small>千</small>	二〇〇	一、一六〇、〇〇〇	一、六三五、〇〇〇
事務	五、四五〇 <small>千</small>	〇・六〇	二、四〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇
合計	一、九〇〇、〇〇〇	〇・三〇	一、三〇〇、〇〇〇	浚渫鐵道、道路、橋梁及上屋 を除く船溜、航路標識、新船溜防波堤等 を含む 浚渫船を含む

昭和十五年八月

清水港擴張計畫調查委員會

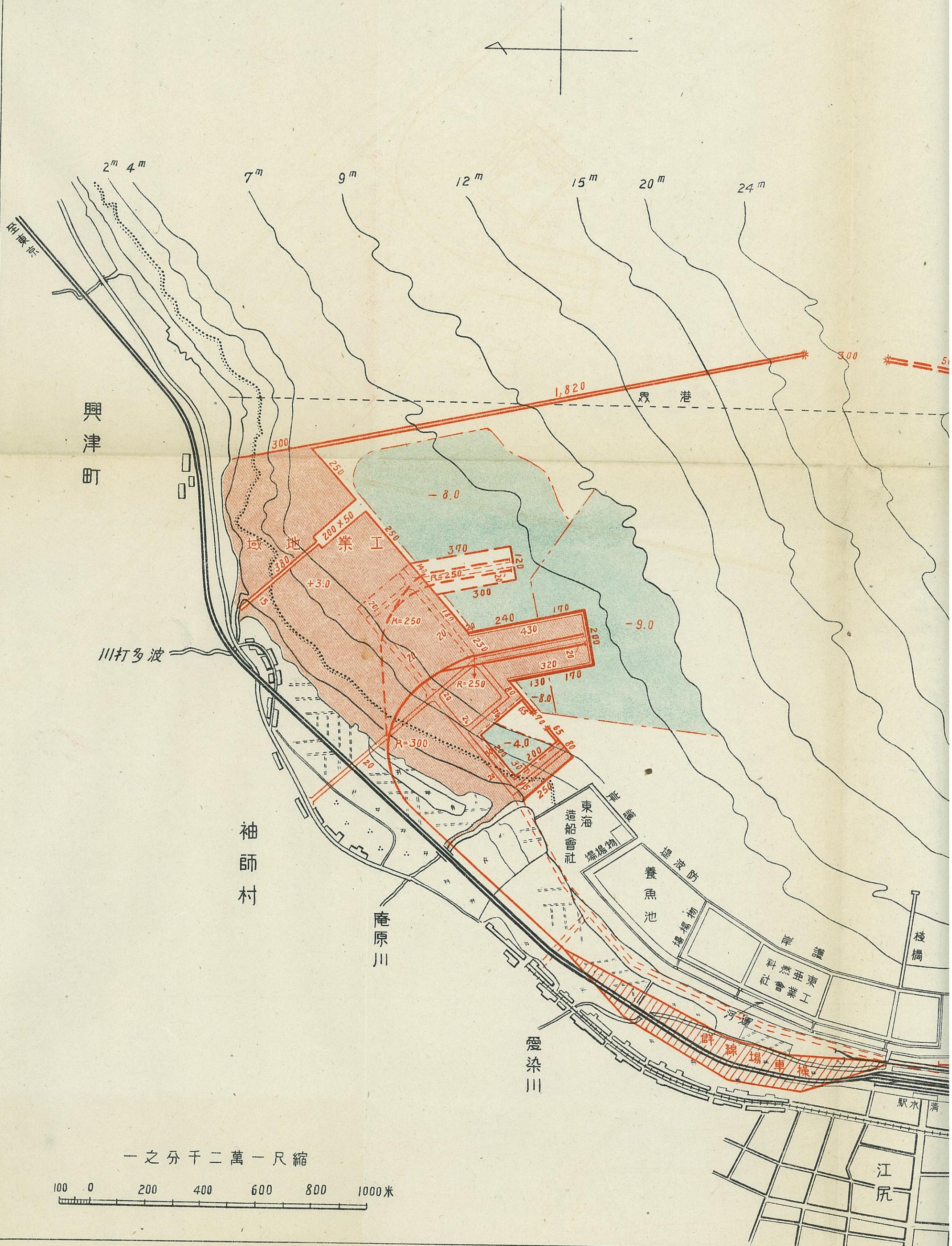
安藝杏藏一

大阿春

矢曾木

新沼節

次均郎





清水港修築計畫平面圖

